
毒薬と約束

英華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

毒薬と約束

【Nコード】

N5831B

【作者名】

英華

【あらすじ】

「心中しましょう」と灰原哀は江戸川コナンにあっさりと言った。心中のための毒は、実はAPT-Xの解毒剤だったことにコナンは安堵するが、哀と母親である工藤有希子の提案により、一ヶ月の間を別荘で過ごすこととなる。そこから始まった心境の変化と、ずっと泣かせていた彼女も、あるいはそれ以外の誰も傷つけたくない一心で、約束を律儀に守ろうとする新一と三人の葛藤。注）明らかに「新志」です。このCPに同意できない方はこの先にお進みになりませんように。それらに類する誹謗中傷は一切受けつけません。

1、心中しましょう

1、心中しましょう

「二週間後、伊豆の別荘で心中しましょう」

彼女にしては珍しくシナモンシュガーを少し入れた珈琲を啜りながら灰原哀はあっさりと言った。

普段使うカップよりひと回り大きなカフェオレボウルを丁寧に両手で抱えるようにして持ち、ゆっく

りと口に運ぶ。辺りにはシナモンと珈琲の香りが漂う。

彼女はあいかわらず感情のこもらない言い方で話して、嬉しくも哀しくも楽しくもない顔をしてい

た。それはとうの昔に慣れていたことで、気にもとめていなかった。そうするのが彼女なのだと思

っていた。

しかし、”心中”とは。

優雅とも言える佇まいをする彼女の口から聞こえたその言葉に狼狽して、思わず言葉を失った。

「それって、無理心中ってことか？」

たつぷりの沈黙の間にも、眉ひとつ動かない彼女の顔をじつと観察したあと、江戸川コナンはよう

やく口を開いて訊いた。

「いいえ。あなたも私も快諾しているから、単なる心中」

哀は膝の上におかれた雑誌から視線をあげて、啞然とするコナンを見た。

仲良くしましょう、と悪びれなく言う。

「俺がいつ心中に同意したと？」

「あなたと私が出会った日よ。忘れたの？私は約束を守る主義なの」
心中を提案した恋人でもない彼女はにっこり笑う。ふたたび雑誌
に目をやり、華奢な指でぺらりと
めくる。

いや、少し楽しそうかもしれない。口もとがわずかに緩んでいる。
どうせまた”たち”の悪い冗談だろう、とコナンは思った。

つかみどころの無い彼女の様子を伺うようにして見ながら、ソフ
アに背をぶかっとなねる。

「有希子さんには連絡しておいたわ。江戸川コナンと灰原哀を消す
準備よ。身辺整理しておいてね」

ああ、そーゆーこと。そうだよな。伊豆の別荘って、我が家のだ
し。。。っていうか。

コナンは慌てて、もたれた背を起こした。

「解毒剤ができたってことか？」

「そうよ、なにか？」

コナンははあ、と深い深いため息をつく。寝食を惜しんで、それ
こそ並大抵でない苦労をして作っ
たはずなのに、それを味わう感動の欠片もない言い方だ。哀のあま
りに素っ気ない返事に呆れてしま
う。

「お前も飲むんだな？」

「仕方ないじゃない。毒をひとりですますわけにはいかないでしょ
う。本当は不本意なんですけど」

裏切り者には死の制裁が待ってるのに、と言ってうつむいた彼女
は、小さくため息をついて困惑し
た顔をした。手放しでは喜べない、ってこと。

言わんとすることもわかるけれど。どういうわけか、彼女も解毒
剤を服用することを選択してくれ
たらしい。

「あと、それからね」

と哀は言った。

「一ヶ月分の荷物を用意しておいて。経過観察と静養を兼ねての旅行にするから」

”旅行”という悠長な単語で表現されたことに、哀の解毒剤に対する自信が窺えた。^{うかが}

今は二月に入って少し経ったところで、外のキンとした寒さはあいかわらずだった。コートも手袋もまだしばらく手放せないでいたが、戻ってくるころは少しあたたかくなっているはずだ。

「春休みの間にご挨拶がてら、高校に顔を出せるといいわよね。三年生の始まりから登校できるし。」

三年に進級できるよう、有希子さんが先生に掛け合うって言ったわ。でも、そもそも出席日数が足り

りるのかしらね。そうそう。万が一なにかあるといけないから、コナンのうちに蘭さんに電話の一本くらい入れておいたら」

すっかりぬるくなった珈琲を啜って、哀が話す様を見ながら沈黙してしまった。他人のその後の生

活まで配慮することは、言ってみれば実に”らしい”ことだが、饒舌な彼女は奇妙なほどに稀だ。

「なあ、良いことでもあったのか？」

今日は珍しくよく喋るよな。コナンは素朴に思った疑問をぶつけてみた。

え？と、少し考えて、そうね、と哀は言った。

「解毒剤が完成したことかしらね。たぶん素直に嬉しいのよ」
できあがった喜びはひとしおなの、とひっそりと笑う。

「私のプライドはね、たぶんあなたたちが考えているより、ずっとずっと高いの。だから、組織でや

ってこれたのだろうし、必要だと言われたのよ。もちろん、お姉ち

やんのためもあつたけれど、やっぱりそれだけじゃやっていけないわ」

今の彼女は、思わず笑みがこぼれる、といった感じだ。恍惚の中にいる。

今までに見たことのない表情の。

自信に満ちあふれた化学者の。

あるいはシェリーと言う名の彼女の。

ふと、見てはいけないものを垣間見た気がした。

+++

哀から心中を提案されて二週間後の二月下旬、三人で伊豆の別荘に向かった。三人というのは、哀が居候する家主の阿笠博士と、コナンと哀だ。

コナンの両親である工藤優作と有希子とは、現地での待ち合わせにした。自由奔放な暮らしを趣とするふたりとは、そうすることが無難だ、というコナンの提案から、本日のような待ち合わせに至った。

博士の愛車である黄色いビートルは、決してなめらかな走りをするわけではない。エンジン音も少々うるさいし、高速に乗れば風きり音が耳につく。こじんまりした車内には暖房が弱く効いて、ほんのりあたたかいだけなので、みなコートを着こんだままにいる。

車の音がいちばん多く耳に入ってくるくらい、車内はひっそりとしていた。これから行うことに対しての緊張からか、いつもより口数が随分と少ない。

いつもならたとえ同じ空間に居合わせても、勝手気まま、三人三

様で、お互い気を使うことのない
気心の知れた存在。でも今日この場に限って言えば、この沈黙は妙
な緊張がある。

「子どもの姿も、もうすぐさよならね」

その静寂を破るように、ふと、哀がこぼした。

コナンは哀を卑怯だと思う。あえて感情を挟まずにして、自分は
そこに何も思っていないのだと主
張するような言い方をする。

でもここ最近の哀を思えば、その言葉がどう意味しているのかは
明らかだった。

数日前、幼い彼らに別れを告げた。

姿を隠すために通った小学校の、仲良くした仲間。

短い間だったとはいえ、幼い彼らにとっても、本来の姿の時には
子どもらしからぬ生活を余儀なく

した彼女にとっても、お互いの存在は大きかったのだと、あらため
て思った。

彼らは号泣してしまった。たぶんこうなると、分かっていたこと
だけれど。

男ふたり、みなよりひと回りもふた回りも大きな身体を持つ小嶋
元太と、小学一年生にしては博識

なそばかす顔の円山光彦。そのふたりが涙を浮かべている姿に、心
臓がずきりと痛んだ。

愛らしい、という表現がよく似合う吉田歩美、彼女にいたっては、
嗚咽しながら激しく泣きじゃく
って、痛々しいほどだった。

哀は歩美の肩を抱きながら苦しそくに、ごめんなさい、何度もそ
う言った。歩美は哀にしがみつい

て離さずに、随分長い時間そうしていた。

それはまるで、行かないで、と言っているかのようにも見えた。

陽が傾きかけて家路につくころ、泣きはらした歩美はようやく少し落ちついた。ごめんね、と歩き

ながら言い、歩美は照れくさそうに笑った。

反対に哀は、始終傷ついた哀しい顔をしていた。

以来、哀はため息を頻繁にこぼす。以前にも増して。

「嫌か？」

哀は外の流れる景色を見たまま、コナンの問いかけに軽く頷いた。

「私は嘘をつくことなんて、平気なもの」

真正直なあなたとちがつてね。哀は皮肉めいて言う。

嘘。名前も年齢も、存在すら嘘。偽って生きていくのもひとつだ
という彼女。

「でもさ、灰原」

哀は大きく首を振って、言わなくていいわ、と言い、コナンの言葉
を遮った。

「わかってるわ。あなたの言いたいことなんて。聞き飽きたもの」

ため息みたいに哀は言った。

伏せ目がちにして目を合わせようともしないのは、まだ踏ん切り
がつかないのかもしれない。

たしかに、この数日の間に口が酸っぱくなるほど言ったかもしれない。
ない。

一緒にもとの姿に戻ろう、と。

そのたびに交わされた、押し問答。そのたびに見た、傷ついた哀
しい顔。

彼女から心中しよう、と言ってきたのだから、と高をくくって
いたのかもしれない。

戻ることをあたり前、という前提に少々強引に言い張って、彼女のぐらぐらと揺れる弱い否定をそのたびに強く振り切った。

「きつと、怖いだけよ」

この期に及んで、まだ整理がつかないの。

あなたに毒を服用させることも、灰原哀を捨てることも。

（あなたが蘭さんと恋人になることも、やがて組織の追っ手が来るだろうことも）

諦めにも似た声で、ひとり言のようにつぶやいて、弱々しい顔を一瞬見せる。

バックミラー越しに運転する博士と目が合って、ふたりで苦笑いをした。

俺は、もとの姿を、工藤新一を取り戻せることに少し浮かれていたのかもしれない。

二週間前、いや、もっともっと前から、解毒剤を作るために哀が頻繁に学校を休むようになってか

らより一層多くなった、時々ふと見せる思いつめた表情にも、複雑な表情にも、怖いだけ、と言った

その言葉にも、この時はまだ、何も見出せずにいた。

その小さな胸の中で本当は、かつてない大きな決心をしていたのに。

+++

そこはわりと緩やかな山の斜面の木立の中にあつた。他より少し小高い場所に位置し、間違つて人

や車が迷いこむことはあつても、通りすぎることも、あるいは訪れ

ることも滅多にない。

冬枯れの木立の中、そこそこ広い敷地の中に、一軒だけぽつりと建つ別荘。別荘と言えども実際は

こじんまりとした洋館、と言ったところだ。日頃からすみずみまで管理が行き届いているとみえて、思った以上にさっぱりとしていた。

車が玄関の前に停まり、それぞれ降り立つ。

そこを訪れたのは、本当に久しぶりだった。あんまりにも昔のこととで、正確な場所すら空覚えだったほどだ。

以前、ここに来たのはいつだったのかと、コナンはふと考える。

あれはたしか中学に上がるより少し前で、蘭と毛利のおっちゃん
と妃さんもいて、優作と有希子も

いたと記憶している。その当時、”あの”両親が衝動買いした物件
で、買ったばかりの別荘に
み
な揃って遊びに来たのだった。

以来、自分は一度も訪れることもなく今日に至り、こんな形で利
用することになるとは、この上な
い皮肉だと、ぐるりと見渡しながらコナンは思った。

「なにため息ついてるの？」

いつの間にかとなりになっていた哀が訊いた。

「母さん、ここを使うこと喜んでただろ？」

ええ、とつても、と言って哀は荷物を車から下ろす。はい、あな
たの分。サンキュ、と受け取る。

「ある程度は送っただけで、まだあるから手伝ってね」

わーった、と返事をして荷物を運ぶ。なにしろ一ヶ月だ。男の自
分でもスニーカーに満杯でそれ

なりの荷物になってしまった。哀も然りだが、それに加えて医療用

の機器だの、薬だの、ノートパソコンだの諸々あるらしい。それもちょっとした量だという。

はつきり言って面倒な旅行だ。

けれど思うことがあるんだろう、とコナンは考えて、哀の申し出に従ってここへと来た。あえて彼女の思惑も訊いていない。

先に到着していた優作と有希子とリビングで顔をあわせ、待ったのよ、と満面の笑みで迎えてく

れた。雄弁なこのふたりが加わるだけで、空気が一変して急に騒がしくなる。

正直言えば、このふたりがこの場に同席するというのはご遠慮していたどころと考えていた。

それなのに。

「だって新ちゃんが心配じゃない。私ひとりでも必ず行くから、いいわねっ」

電話口で耳が痛くなるほど大きな声を張り上げて母親は言い、コナンは頭を抱えた。わが親ながら

少々恥じ入る。彼女は人の言い分に聞く耳など寸分も持ちあわせていない。

その計画の首謀者である哀は、その電話口のとなりで、素敵なお母様ね、と悠々と言い、にっこり

笑った。誰かのよき計らいでな、と心の中で呟いて、コナンは哀を恨んだ。

そうして、ふたりに半ば強引に押し切られたのは先日のこと。

そもそも哀から連絡が入った時に、伊豆に別荘がある、と言ったのは母親だろうし、彼女の胸の内

ではその時すでに伊豆行きは決定していたことだろう。

結果として、居てくれて良かったと思う。騒がしくしてくれて良かったと思う。

今、彼女を静かにさせておくのは得策ではない。とはいえ、廻りが騒がしかりうがそれに構わないのが哀であるが、少しはましってもんだらう。

+++

荷物も運びいれ、送った荷物も無事届き、リビングのソファに腰を下ろしたのは午後になって、陽が傾き始めたころだった。

「よかつたわね。解毒剤ができて」

有希子はにっこり笑い、哀ちゃんも食べて、と菓子を勧める。和菓子、好きだったかしら。

ええ、と言いつ、哀は口もとをほころばせて差しだされた菓子をひとつ手にとり、いただきます、と言いつ。

目の前に並べられる菓手に手を伸ばす博士に、食べ過ぎないようにせいぜい数個になさい、と哀はいつものようにたしなめる。

「数個とは、四、五個じゃな？」

そんな風に懇願する博士がまるで子どものようで、笑いを誘った。「いいえ、二、三個よ。年齢を重ねると時の流れがゆったりとしてね、”数”が増えるのよ」

数日前とか、数時間後とか。哀は朗らかに言いつ。

ほお、と博士は合点して頷いている。

「たしかに、数日と言えば四、五日じゃな」

「でしょう。私は二、三日ですもの」

博士も気をつけなさい、と哀は悪戯っぽく笑って菓子を口にす。

「あらおいしい」

「そうですね、ここの栗菓子、お気に入りなの」

有希子が満足げに明るい顔をする。

ついさっきまで心臓を重苦しくしていた心配は杞憂だったと思うくらい、ここにそろった顔はみな笑って、よく喋って、よく食べていた。それは単に、お昼ご飯を早い時間にとって、だから少量しか食べれなくて、それ故いま空腹だからとかじゃない。待ち望んだ解毒剤ができて、もとの姿に戻ることを喜んでいる。

博士は久しぶりに甘いものを口にできたからかご機嫌だったし、父さんも母さんにもっこりと笑って言葉巧みに話す様子はあいかわらずだった。哀はさっきまでの物憂げな表情は消えて、すっかりくつろいでいるようだ。

ふと、哀と目が合う。ふたりで目だけで笑った。やっぱり機嫌がいいらしい。

哀はおもむろに傍らにおいた鞆の中からピルケースを取りだして、これでしょう、と言う。

「明日、朝食をとってからにしましょう」
慌てても仕方ないわ。今日は移動で疲れているし。体調は調べてからがいいもの。

哀の意見に特別反論することもない。わかった、とコナンは言うて、大人三人もそれに従った。

+++

翌朝。

待ちきれない有希子といつものように目覚めた哀によって早々と

用意された朝食は、すんなりと胃の中におさまった。

二階の自室で解毒剤を飲むから、と哀は言い、心配そうにしている大人たちをおいて、ふたりでダイニングをあとにした。そして部屋の前まで来て歩みを止める。

「これってやっぱり心中だと思わない？」

そう言われて振り返って顔を見る。心中、という言葉とは裏腹に、むしろ落ちついていた。

「お手手つないで仲良く横たわって飲むつもりか？」

「それはお断り」

「俺も」

ふたりで顔を見合わせて小さく笑った。

諦めからか、あるいは踏ん切りがついたのか、どちらかを察することは不可能だったが、哀の顔に物憂げな様子はもうなかった。

哀はポケットからおもむろにピルケースを取り出して、感慨深げにそれを眺めた。

そしてまたあの表情をする。恍惚とした化学者の

「灰原」

コナンは慌てて彼女の名前を呼んだ。

「なによ、急に」

大きな声を出してびっくりするじゃない。

「わるい」

コナンが謝ると、謝ることないわ、と哀は小さく笑う。

呼ばなければ、あの恍惚としたまま消えてしまうような錯覚を覚えた。それは本当に気のせいかもしれないし、気のせいだと思ったかった。

それでも、哀はなにもなかったかのように、また解毒剤に見入る。「これも解毒なんて言うけど、毒を以って毒を制するから、これも

また毒なの」

はいこれ、解毒剤。お待たせしたわね。

そう言っ手渡された、小さなカプセルが小さな手のひらにぽつんとひとつ。こんなややこしい事

情を知らない人間が見たら、市販の薬となんら変わらない、いたって普通のカプセル。

悪いけど、と哀は付け加えた。

「マウスでは100%成功しているし、論理的にも完璧。だからと言って、人間に投与するのは初め

てだから保証なんてしないわ」

意外と無責任なんだな、とコナンが非難めいて言うと、哀は苦笑した。

「だから心中なの」

あなたは天国、私は地獄、もう二度と逢えないかもしれないわね。ふと、哀が弱々しくこぼす。

哀は普段、嫌味なくらい気丈だ。口を開けば憎まれ口があるいは皮肉で、それはもう随分長い間お

互い様のことだ。かと言って、ほとんど気を使わないでいられるし、知識面でも訊いたことに的確に

答えてくれ、色んな意味で無駄な隠し事のない、よき理解者だと思っっていた。

今、この瞬間までは。

儚げな少女だと。放っておいたら壊れてしまいそうだと。そう感じた。

それがどうにも見ていられなかった。ただのおせっかいかもしれない。彼女をまっすぐにしたかつ

た。この危険を痛いほど分かち合える、世界で唯一無二の彼女を。

哀の腕をぐいと引き寄せて、片手で哀の頭を支えて自分の肩にぎ

ゆうと押しつけて、もう片手は肩を強く抱きしめた。はじめは無理矢理押しつけていたけれど、すぐに力が抜けて、彼女の身体はされるがままになっていた。

「生きてくための一歩だろ。死ぬのは許さねえからな」

そうね、と哀はやわらかく言う。

「いいの。死にたいとか、死にたくない、とかじゃなくて、死ぬ覚悟はとうの昔にできてるの」

だから、何が起こっても平気なの。今はあなただけが心配。

肩にもたれかかったまま、哀は悟ったように言った。

力が抜けた哀をふんわりと抱き寄せて、沈黙したまましばらくそのままのままでいたが、やがて哀はコナ

ンの腕をするりと抜けて、ありがとうと言い、にっこり笑った。

「少し強くなれた気がするわ」

「お互い様だろ」

強くなれた、と言うわりには少し頼りない顔をしているが、とりあえずは大丈夫だ、という気がした。

「次に逢う時はもとの姿のはずよ。無事を祈るわ」

哀が部屋に入って扉がパタンと閉まるのを見届けて、コナンも部屋に入る。

手の中の解毒剤を口の中に放りこんで、水とともにごくりと飲む。

ふたたび、運命の瞬間。

2、閉ざされた時間

2、閉ざされた時間

なんでまた一ヶ月もなんだ。はっきり言って退屈だと、工藤新一は少しイラついていた。

ここ数日は特にその思いが強くなってきた。静養だからと、ゆるりと過ごせと、そう言われても、限度つてもんがあるだろうと。

「身体を正したいの」

もとの姿に戻ってから、宮野志保はそう言った。ここへ来た目的を、そのとき初めて訊いた。

そりゃごもつともだと、新一は頷いた。

身体の無謀な伸び縮みで、全身の細胞が痛んでいるはずだ。新一もそれは重々承知している。

「ゆっくり休んで、身体の治癒能力を伸ばしてあげるの。風邪や感染症、アレルギー、癌だつてこの先かかりやすくなるかもしれないわ」

そのとき志保は誠実な顔をしていたと思う。

細胞を酷使した代償なの。だから、いいものを食べて栄養をとって、適度に身体を動かしてゆるり

と過ごす。これが一ヶ月の目的。思うがままに生活してね。

という、志保の提案。

初めの数日は良かった。

江戸川コナンという小学生だった時分にも自由になる時間は山ほどあったけれど、それ以上に誰にも邪魔されることなく推理小説を貪ることができる。こんなことは長い人生、そう滅多にないことだと嬉々としたのも束の間。

身体はしつかり高校生そのもので、黙ってじっとしてられるほど年齢を重ねてなどいない。その身体は活発に伸び伸びと、気の向くまま動きたいと訴えている。

「どっか遊びに行かぬー？」

せつかく伊豆まで来たんだし。

伊豆に来て数日も経たないうちに、新一は志保に言った。いや、根を上げた、というのに近かった。

「あなたも私もお尋ね者だという自覚は？」

やっぱりそれが。

「ある」

けどなあ、と言うところで、志保に遮られた。

「あなた、すぐ飛びだしていくでしょう。ここへ来たのは、それを避けるために取った手段なの」

諦めて、と志保は言い、にっこりと笑った。

「俺、はめられた？」

ある意味、軟禁じゃねーか。なんだよそれ。新一は懨然とした。仕方ないでしょう、と志保は言い、首をすくめた。

「素敵な考えだと思ったのに。喜んでもらえなくて残念ね」

あらあら、というため息をご丁寧に付け加えて。

こいつはやっぱり冷酷非情だと、新一はそのとき思った。

時を同じくして戻った彼女は、自分とは対照的だった。

もともと他人を気にせずに、自分のペースで物事を進めていく性質なのだろう。阿笠邸で灰原哀と

して暮らしていたときと同じように、大半がパソコンに向かい、時に本を読んで、食事を用意して、

珈琲を啜る。博士はふたりがもとの姿に戻ったのを確認すると、学会があるんじゃない、と言って米花町

へと早々に帰ってしまったが、そのまま滞在し続けている父さんや母さんと差し障りなく、のんびり

とした暮らし向きをしている。解毒剤を作ることから解放された彼女は、極めて穏やかに見えた。

「なにしてんだ？」

「データの整理と論文」

パソコンのディスプレイを見たまま、志保はとなりに立つ新一を一瞥もしないで言う。ふうん、と

新一は頷いて、志保の脇においてある本を手取る。

「これは？」

「ジャーナル」

「どこで手に入れた？」

日本の学会じゃねーな、と新一はその本を手にとり、パラとめくる。

「闇ルート」

あいかわらずキーボードをカチカチと鳴らしながら、志保は素っ気ない返事をする。

「・・・お前が言うとお洒落になんない」

「煩いわね。優作さんにもらったのよ」

学会誌っていいのよ。最新の情報だし、出版されている本とちがって根拠のない主観は入っていないな

いから。組織にいたときは一企業の一医師だったから手に入ったけど。

そこまでひと息に言って、志保は手を休めた。文句ある？と一瞥して抗議する。

「文句は大いにある」

新一は眉間にしわを寄せて反論する。

なあに？と聞きわけのない子どもに言うようにして志保は訊く。

十八歳の姿に戻った志保は、ときどき年上らしくする。つまり新

一は年下らしく扱われる。新一に

とってはそれだって不満のひとつだった。

「不平不満なら受けつけないわよ」

がくつとうなだれる新一と、ほくそ笑む志保。諦めたかのように思えるしばしの沈黙。

「海、行こう」

新一の突然の申し出に、は？と啞然とする志保の手をぐいとつかんで強引に歩いていく。

背後で有希子が、どこ行くのお？と訊ねる声したが、新一はお構いなしだった。

海岸まで、ここから徒歩で十分か十五分といったところだ。緩やかな坂をのんびりと下っていけば

いい。二階の部屋から木立の向こうに小さく見えることは、志保も知っているはずだ。

「危ないわよ」

手をぎゅうと強くつかまれたまま、志保は抗議した。

「でもさ、組織とあんまり縁がない土地だから、ここにしたらだろ？」

志保は少し諦めた顔をして、ご名答、と言い、小さく笑う。

「ちよつとくらい、いーだろ？一ヶ月もあるんだぜ」

新一は悪戯っぽく笑う。

しばらく歩くと、志保は完全に諦めたようだ。初めは引っぱられるようにしていた手も、今はゆっ

たりと繋いでとなりを歩く。

三月の海はまだ寒かった。

びゅう、というより、時折ごおーっと吹く風と、うねりをあげて荒々しく波打ち際に寄せる波しぶき。

「三文小説のようにはいかないわね」

「波打ち際で戯れたい？」

「冗談」

志保は小さく笑って、砂浜の適当な場所で歩みを止める。新一も彼女のそばまで歩み寄る。

幸い、昼下がりの陽射しはあたたかく、長居しなければ身体に差し障りはないと思えた。

「もし」

志保はひっそりと囁く。波音と一緒に入ってくる声を訊きながら、うん、と新一は頷く。

「もしも、その岩陰にジンが潜んでいるとしたら」

砂浜のその先にある岩場を見ながら志保は言った。

「私はまちがいなく殺されるでしょうね」

もとの姿に戻ってからふたりで外出したのは、これが初めてのことだった。

ここに来るまでの道のりの間をやけに神妙な面持ちをしていたのは、ジンのことが頭を離れなかったのだと、新一は察した。

「俺が守るから」

無謀なこと、首をすくめて志保は小さく笑った。いつかその自信過剰が仇になるわよ。

「俺はお前を守るって、前から言ってるだろ」

彼女の嘲笑が癪に障って、少しむきになって言った。

「そうだったわね。でもね、もういいの」

志保はぼつりと言い、傷ついた哀しそうな顔をする。

「あれは江戸川コナンと灰原哀の約束だから」

だから反故。

だったら志保にも、と言いかけて、志保は首を振った。

「もういいの。あなたは蘭さんとの約束があるでしょう。それを守りなさい」

大切なことを言うような、重々しい口調だった。

「じゃあなんで、そんな表情するんだ？」

志保の前に立って、顔を覗きこむ。

「お前、もういいだなんて、ちつとも思っていないだろ」

そう言いながら、志保の肩に腕を伸ばしてぐいと引き寄せていた。そうして、腕の中にすっぽりと入れる。

約束なんて、と新一は思う。

実直に履行できれば誠実でいられるのに。履行されるまでは曖昧で、いい加減で、一方で心の拠り

どころとなったり、時として足枷になる。約束を交わした張本人にとっても、あるいはそれ以外の人

にとっても。それはたとえば志保のように。

「ちょっと、離してつてば」

志保は慌てて腕から抜けようとした。それは小学生だったころならば可能だったかもしれない。が、

男女の体格の差がはつきりとわかる十七歳と十八歳の身体では、誰がどう考えても無理だと思われた。

「いやーじゃねーか。こうしてると強くなれんだろ」

今のお前は弱すぎだつて。新一は廻した手を一層強くする。

志保は一瞬、呆れた顔をしたけれど、そうね、と頷く。そうして、手を緩めて新一の背中に手を廻

してぎゅっとする。

「お言葉に甘えるわ」

突然、艶やかに聴こえた声に新一は驚いて、うん、とだけ頷いた。強い風と波の不規則な音と、互いの吐息の規則正しい音だけが耳に入るだけで、目を閉じてしまう

と閉塞された感覚に陥る。一瞬が永遠かと思うような不思議と閉ざされた時間。

慣れないことに煩かった心臓が静かになるころ、志保がいいのと訊いた。なにが？とひっそりと返事をする。

「優作さんも有希子さんもいるけど」

その岩陰。あなた、気づいてたでしょう。

海岸沿いに走る道路と砂浜を隔てる位置にある岩を、志保は一瞥する。

ああ、そうだった。来る途中には、少し離れた後ろをひた歩きしているふたりには気づいていたのに。

新一は自分の愚かさを呪った。

「しょうがねーだろ」

新一は拗ねたような口ぶりで言う。無意識に手を伸ばしたんだから。

互いの抱きしめていた手を緩め、名残惜しそうにゆっくりと身体を離す。

「あなたでも迂闊なことするのね」

「うるさい」

新一は口を尖らせて言い、ぷいと顔を背けてひとり歩きだして、行くぞ、と言う。

照れてるの？と肩越しに志保は訊いて、笑ってあとを追った。

「もう大丈夫だろう」

「そうね、あとはふたりに任せましょう。子どもじゃないんだし」
「いや、大人と言うにはまだ早いよ」

優作は微笑んで言い、でも、とつけ加えた。

「まさか、一ヶ月ずつといるつもりはなかっただろう？」

「だから、明後日の便、成田発、とつてあるわよ」

じゃあそれで、と頷いて、優作と有希子は顔を見合わせて笑った。

「なーにしてんだよ。ったく。あとつけるなんて、趣味わりーぜ」

新一は岩陰に潜む両親の前で仁王立ちをする。優作と有希子は乾いた笑いをして、奇遇だな、とし

れつと言う。

「どーだか、興味本位だろ」

ため息混じりに言いながら、どこまでも呆れている新一と苦笑いする工藤夫妻に、志保は顔をほころばせた。

「せっかくだから、珈琲でもご一緒に」

志保は朗らかに言った。ほら、来る途中にカフェがあったじゃない。行きましよう。

いちばん嬉しそうにしたのは母さんだった。志保の手を取り、軽やかな足取りで先を歩いていく。

無理にでも引き連れてきてよかった。新一は清々しいと思った。

+++

目を追うごとに陽射しはあたたかくなり、空気がざわざわとし始める。

この別荘暮らしにおいて、特段”おかしな”ことが起こっているわけではない。むしろ平穏だ。

だからこそ怖かった。

その日の夜も、また目を覚ました。

寝つきが悪いわけではない。一度はすんなりと眠りに入る。が、二時間ほどすると目がぱっちり

開く。そして、たった今までぐっすり寝ていたことを少しも覚えていないかのようになり、頭はくっきりと冴え渡ってしまう。

まただ。

志保の姿に戻ってからというもの、毎日がこの繰り返しだ。

月明かりがぼんやりと射しこむほの暗いキッチンで水をぐくりと飲み、志保は小さく息をつく。

窓から見える真夜中の、まだ暗い庭はひっそりと静かだった。林の中のこの別荘は物音ひとつもない。不気味なほどに。

「志保」

突然、背後からの名前を呼ぶ声に殺気立って振り向くと、新一の姿があった。

「心配を消さないで」

心臓に悪いわ。声の主が新一だったことに安堵して、肩の力が抜けていく。

「お前もだろ」

「私は身についた習性よ」

仕方ないでしょう。コップをシンクに置き、起こしてごめんなさいと謝る。

「どうした？」

ふいに、やさしい声で訊ねてくる。

この人はやさしすぎる、と志保は思う。新一の姿になってからより一段と。

あんまりやさしいと、時にそれは残酷でしかないのに。それを彼

は知らないでいる。

「志保？」

そう。そうゆう風に。ものすごくやさしい。瞳も、手も、声も。うっん、と首を大きくふって、なんでもないわ、と言い、目を逸らした。

取り繕った嘘を見透かされてしまうような気がして、こんな時はあの目を見ていられなくなる。

「部屋、戻りましょう」

志保はそう言って、新一を促した。

どうせ眠れやしないのに。またぼんやりとしながら、夜が明けるのを待つだけなのに。

その晩二度目になるおやすみを部屋の前で言うと、おいで、と手招きをされる。なによ、と訝しげに見ると、どうせ眠れないんだろ、と新一は言う。

見透かした瞳。自信ありげなその態度。今はそのどちらもが嫌いだと、志保は思った。

「結構よ。ひとりで眠れるわ」

そう言いながら、新一から目を離せなくなっていた。

眩暈がしそうだ。

やさしい新一に甘えないようにと、年上らしくたしなめたりもしたが、そんなことはちっとも効果的ではなかった。もともと同年であるコナンと哀でスタートしたのだ。もとより、たかだかひとつの年の差など無意味だとわかりきっているのに。

「お前が寝るまでいてやるから」

な？と新一は軽く笑った。

「呆れたひとね」

志保は大きいため息をついた。そして、無意識なのだから、と自分に言い聞かせるようにぼつりと

言う。

このひとがこんないたずらな発言を平気で言ってしまうのは、天性のようなやさしさから来るものだ。だから仕方ないのだと。

それに、拒めるわけなんてない。

抱えている罪悪感とか後ろめたさとかの背後には、せめてここにいる間だけでもと願う自分が見え隠れしているのに。

肯定の言葉を口に出して言わない代わりに、部屋の扉をそっと開けた。振り返って目が合うと、や

っぱりその目から離せなくて、寝るぞ、と新一は事なし気に言うから、もうなにも言うことなんて志保にはできなかつた。

以来、真夜中に目を覚ますことはなくなった。そして、安堵と困惑が入り混じった複雑な気持ちを抱えて、毎朝目を覚ます。

非日常的な毎日だと、となりに眠る新一を見て志保は思う。

自分も、あるいは新一も卑怯だ。

多くを語らずに、あたり前のようにして寄り添う。かと言って、お互いに、この先にあるものをあえて問いただすこともなかつた。

今は口にははいけない。志保はそう思う。時がくれば、「そうなる」ことはわかっている。

それでも、志保、と耳元でささやくように言われると、卑怯だと考えていたこともどこか遠くに忘れて、ずるずると惹きこまれていく。

ベッドからひとりそっと抜け出して、ふたり分の朝食を用意する。

最後に珈琲を淹れていると、頃合いを見計らったように、おはようという声がする。

それがここでのあたり前になった日常だ。

拒めるわけなんてない。

だから、今はやさしい瞳も、手も、声も受けいれる。抱擁も、口づけも、身体をあわせることも、なにもかも。

「どうした？」

パンの最後の欠片を口に放って、新一は訝しげに訊く。

「あなた、ずるいわ」

責任転嫁。そう思いながらも、志保は新一をにらんで恨めしそうに言う。

新一はへえ、と言い、心外だ、という顔をする。ゆっくりと珈琲を啜ってパンを流しこんで、ごちそうさま、と言いながら志保を見る。

「どこが？」

そんな風にあっさりと言ったのけるところなんて、ため息が出てしまう。

「人の弱みに付けこむところ」

「そんなつもりは毛頭ないけど？」

「だったら、尚のこと悪質ね」

志保もごちそうさまと言い、残りの珈琲をぐくりと飲み干す。そうして、空になった食器を持ってキッチンへと向かう。

今はまだ、手を伸ばせば届く距離にいるのに。

志保は訝しげにする新一の首に手を廻す。新一の手が自然と背中を廻ってぎゅうと抱きしめられる。

そこにいるのだと実感して、背中をやさしくなでる手にほっと安堵する。

「やっぱり変だ」

「そんなことないわ」

首を横に小さく振って否定する。

そういう新一の無防備なやさしさに、時々どろどろしていいのかわからなくなる。

それはとても苦しい。

そのやさしさは、愛されていると錯覚させる。そんなことはありえない、と頭のどこかでわかっているが、その心地よさに溺れていく。

「博士のお迎え、いつだっけ？」

「ちょうど一週間後」

そっか、と新一は感慨深げに言う。

息苦しいのに。

廻した手を強くして、もっと近づこうとしてしまう。背中を、髪をなでるこの手はなにを考えているのか、さっぱりわからないままで。

なにもかもが滅茶苦茶だ。頭の中で浮かんでは消える支離滅裂な思考に困惑して、新一の肩に額を押しつけたまま、志保は苦笑いした。

「案外、早かったな」

この一ヶ月。

「散々、文句言ってたくせに」

だから、長い人生のたかが一ヶ月だと言ったでしょう。

そだな。新一は頷いて言う。

なにが正しくて正しくないかだなんて、もうわからなくなりそうだった。

決別しなければならぬ。手放せなくなるその前に

。

3、純粹無垢な彼女

3、純粹無垢な彼女

冬枯れの中を身に纏っていたぶ厚いコートはもう要らなくなっていた。衣服は店先に並びだすのと同時に買うことに決めていると、親友は言う。誰より先に手に入れたいのはもちろんのこと、シーズンの初めに出てくるものが一番丁寧に作っており、仕立てがいいからだ。

今日はその彼女に付き合っただけ買った服を着ている。伊豆に向かう鈴木家リムジンの車中。

時は三月下旬。学校は春休み。

毛利蘭は親友である鈴木園子と一緒にであった。鈴木家の別荘が伊豆にあり、春休みを利用してふたりで羽を伸ばしにきたのだ。以前訪れた時、あれは夏だった。そして、例のごとく事件が起きてしまった。

「今回はなにも起きないといいわね」

蘭は当時のことを思いだして苦笑いした。その時は一緒に行った、今はもういない少年を思いだして、無意識にため息がこぼれた。

「蘭。あんた、またため息」

ゴメン園子、と言い、またため息をついてしまった。首をすくめて呆れている園子を見て少し笑った。近ごろ、ため息が習慣になりつつある。いけないと思いつつも、もう止めようと思いつつも、

い嘆息してしまう。

原因は誰より自分がかつている。

コナンくんがいなくなつてからだ。

幼なじみの新一と入れ替わりに現れた小さな少年を、知らず知らず頼りにしていた。時に、新一の言葉を届けてくれるから、とかじゃなくて、実際頼りになつたのだと思う。

所詮、自分はひとりで生きていけない種類の人間だ。だれかれ頼りにしてないとダメになるタイプの。新一を待ち続けている、その行動はある意味、当てにして、たぶん大きく頼りにしている証拠だ。

「もうすぐ着くよ」

その声以外の景色を見た。別荘に行く前の寄り道。おいしいケーキがあると評判のカフェ。少し休憩しよう、という園子の提案だ。

そこに、少し目を惹く男女がふたり。

彼らはぼかぼかとする陽気の中、のんびりと歩きながらやってきた。

午後のティータイム時とはいえ、客はまばらであった。東京の喧騒で慣らされている感覚から言えば空いていて、落ちつける雰囲気の良いお店だった。

ふたりはしばしそこを訪れて、気分転換を図る。他人に干渉されない造りと、その静寂な雰囲気と香りのよい珈琲を好んだからだ。

ふたりが伊豆に来て、もう三週間が過ぎようとしていた。「昔ならずつと部屋にいても平気だったのに」

ここへ訪れるたびに、言い訳みたいに志保は言う。

「窓の格子が檻の柵に見えるだなんて、随分贅沢になったものね」
「それが普通だろ」

深く考えさせないように、新一はさりげなく言う。

外出をできるだけ控えていたふたりが今日もどちらともなく言いだして、このカフェにやってきた。

珈琲とシフォンケーキ。

まもなく運ばれて、ゆっくりと味わう束の間の休息。

蘭と園子のもとに紅茶とシフォンケーキが運ばれてきて、フォー
クでつついていた時だ。園子がふ

と顔を真正面に向けると、あまりの驚愕に頓狂な声をあげそうになる。その声はかるうじて押し殺して、今一度そこを見やる。

蘭からはふり向いて見なければ見えない位置の、お互いの声も届かない、姿もなんとなく確認ができるくらいの少し離れたその席に、久しく会うことのなかった見知った顔があった。

知らない土地で知っている人物に出会うこと自体、結構びっくりすることだ。それがまして、クラ

スメートであり、親友の幼なじみであり、なお且つ一年近く行方不明になっていて、親友が逢いたいと懇願しても叶うことのない相手なら尚更だ。

しかも。

女性を連れている。その上、とびきり美人の。

自分はもちろん知らない。おそらく蘭だつて知らない。

もしかして、と園子は考える。新一の評判はすこぶる良い。それを知つての依頼者かもしれない。

でも、それは虫の良すぎる甘い考えだと、園子は思い直す。

「あなたと出かけると、事件が起きるのが心配よね」

「それは失礼だろ」

新一は抗議し、そう言えば、夏に園子の別荘で事件があったんだ、と話します。

ほらご覧なさい、今日は無事を祈るわ、と志保は冷たく言い放つ。新一は自分のケーキを早々と片付けて、珈琲を啜りながら、ケーキをゆつくりと味わう志保を眺める。

志保の皿のアイスクリームはまだ手付かずだ。彼女はケーキばかり食べているから、アイスクリームはとるととろと溶けだしそうだ。

新一はそれを黙ってスプーンですくい取って口に放る。二度目、同じようにすくったところ、スプーンごと横から伸びてきた手につかまれて、彼女の口におさまってしまった。

おいしい、と志保は小さく笑う。とられた、と新一は恨めしそうに言い、志保の唇に自分のそれを重ねる。うまいな、としたり顔で新一は言い、志保に軽くにらまれた。その際に、ケーキにも手を出して、新一の口へとおさまる。

「志保が作ったケーキのがうまい」
新一はひとりごちる。

「ここに来る最大の目的は気分転換なの」
だから目的達成。志保は強く主張する。そだな、と新一も同意して、ふたりに笑った。

目の前で繰り広げられたその光景に、園子は思わず息を飲んで呆然とするよりほかなかった。それは園子の心臓にひどく衝撃的で、美しく映ったからだ。

その顔に、表情に、手の動きに、視線に、身体の寄せ方に、一挙手一投足まで目が奪われていた。

恋人同士のそれとして、すんなり受けいれられてしまうほど、ふたりは親しげで、お互いの距離がなかったのだ。恋人たちばかりがほとんどを占めるそのカフェで、あまりに自然でごくあたり前のようにふたりはいた。

時折見せるやさしい笑みも、ある意味不器用な新一なら意識的にすることは無いと思う。

あれじゃあまるで恋人同士じゃない。眉根を寄せながら、園子はひとりつぶやく。

ふと気付くと、蘭がこちらを見て訝しげな顔をしている。きつと青くなったり赤くなったり、忙しない表情をしているに違いない。

「な、なに？蘭」

平然を装いつつ、園子は言う。できるだけ笑うようにしたから、頬が引きつっているのがわかる。

「なにつて、それは園子のほうでしょ。大丈夫？」

蘭は心配そうに訊き、顔を覗きこんでくる。

今まさに目の前で起きていることを覚られないように、大丈夫、大丈夫、と慌てて返事をする。

そう、と蘭はふたたびケーキにフォークを刺す。ひと口、口に入れて、おいしいね、と満足そうに顔をやる。でしよう、と頷いてみせた。

まったく、どうなってるの。訳がわからないまま、蘭に気付かれないように小さくため息をついて視線だけ上にあげて新一をキッと睨む。

その視線によく新一が気がついて、一瞬驚いた顔をしたが、すぐにいつもの顔に戻り、となりに座る女性となにやら話している。園子はその様子にふたたび眉をひそめた。そうやってキスするみたいに顔を近づけて話すから、より一層慌ててしまう。そしてこちらを向いたかと思うと、人差し指を顔の前で立てて、内緒だ、というゼスチャーをしてみせる。

その仕種に思わず腹が立って立ち上がるうとした時、蘭の善良的な瞳が視界に入った。

そんなことをしても、園子は窮した。

蘭を傷つけるだけだ。彼女には何の罪もない。蘭には幸せになつて欲しいのに。

意気消沈して、盛大なため息をつく。蘭はあいかわらず怪訝な顔をし、園子は苦笑いした。

どこでどう暮らしていようが、あいつの勝手だ。そんなことはわかってる。でも、ただじゃ済ませないんだから。

心の中でそう呟いて、高揚した気を抑えようと紅茶を啜る。フォークを持ち、ケーキにえいっと一刺しする。意気込んだフォークは上手い具合にささり、一口大の欠片ができる。それを口の中に放りこんで、腹の中の煮えくり返った気持ちを抑えようとするが、そんなことは気休めでしかない。

視界の端のほうで、暢気に手をひらひらさせて立ち去ろうとするふたりの姿が入った。園子は顔をぱいと背けて無視をする。

店の扉がパタンと閉まる音を聞き届けて、ぶしつけとは思っただけれど、蘭に訊いた。

「新一くんから最近連絡あった？」

「一ヶ月くらい前かな。コナンくんがいなくなる少し前。電話あったよ」

「どうだった？」

「どうって、いつも通り。なににも変わらないよ」

「どうして？」と蘭は訝しげに訊く。園子ったら変。そうかな、ときこちなく笑う。そうよ、絶対に。

念のため、まさか他人のそら似ではないとは思っけれど。

「新一くんってこの辺りに縁がある？」

「うーん、そうねえ。蘭は少し考えて記憶をたどる。そうそう。」

「別荘があったかも。中学生にあがる前、一度来たことがあるよ」
伊豆のどの辺りだったのかも覚えてないけど。

園子はふうん、と小さく返事をして、窓から見えるふたりの背中を横目で見送った。

今回はなにも起きないといいわね、なんて悠長に言ってる場合じゃない。

めがねのがきんちよがいなくなったからって、ため息ついてる場合じゃない。

とてつもなく大きな事件が起こってしまったと、園子はおそろしく憂鬱な気分になっていた。

+++

別荘に到着しても、園子はイラついてた。ご飯を食べても、お風呂につかっても、大好きな真さ

んからメールが来ても、とにかく何をしても心の底から怒れていた。今ここで蘭にぶちまけられないストレスと、ヤツに報復できない

ストレス。

その横で蘭が、どうしたの？と心配そうに訊く。そんな彼女のやさしい気づかいが園子は好きだ。

女性らしくてかわいいと思う。彼女を好きな男なら、その心配そうな顔ひとつだけで免罪符になってしまいたいそう。

蘭に秘密うちに、調べるように手配はした。でも、それだけでは物足らず、イラつくのだ。

見る気がないテレビがなんとなく点いて、スピーカーから笑い声が無機質に響く。蘭と園子のふたりだけのリビング。

オレンジピールを入れたあたたかい紅茶を啜り、ため息にも似た息を吐く。そして思う。

蘭は、やっぱり新一のことが好きなのだろうか。待たせるだけ待たせて、どこでどう暮らしている

のかさえわからないような、ひどい男なのに。そりゃ、今まで、さんざん冷やかしておいて、だが。

カップをソーサーに置き、園子は訊いた。

「蘭はさあ、新一くんのこと好き？」

そう訊くや否や、蘭は顔を真っ赤にしてごぼごぼと咳きこんでしまった。いまさら訊くまでもない

ことだと、園子はあーあ、と大袈裟に言い、肩でため息をつく。

「な、なによ突然」

「ごめん、愚問だったわ」

もう園子ったら、と蘭は照れくさそうに笑う。

苦笑いしながら、園子はふと思う。新一が好きだという蘭を、彼自身は知っているはずだ、と。

だったら、なにも焦らなくてもいい。あいつは逃げだすようなやつではない。なにをイラつく必要

があるのか。一旦そんな風に思うと、不思議と余裕さえ出てくる。

「新一くんはいつまで蘭を待たせるつもりなのかしらね」

園子はぼつりと言う。今のあいつに言ってやりたい文句が口をついてしまった。

「私は信じてるの。新一は待っていてくれて言ったでしょ」
不確かな危うい言葉だけど。蘭ははにかみながら言い、まっすぐな瞳をする。

そんな風に彼が愛おしいという表情をするから、見ているほうはどうにもできない苦しさでいっぱいになる。

「蘭ったらお人よし」

いつもみたいに冷やかすことはできなかった。諦めに似た声で言う、蘭はにっこり笑った。

「信じてないと恋なんて成立しないと思うの。そもそも恋なんて無謀なもの」

何をどう言われても、私には信じて待つことしかできないの。だから仕方ないじゃない。

蘭ははつきりと淀みなく言う。ある意味、身動きできないこの状況をちゃんと悟って諦めているのは彼女のほうかもしれない。

「それでも、どうしても好きなの」

そんな純粹無垢な蘭の話を訊いているだけで、ほとんど泣きそうになってしまう。と同時に、一方で憂鬱を通り越して暗澹としてくる。

「今日はやけに心配してくれるね」

「いつも心配してるわよ」

ありがとう。蘭は屈託なく笑った。私の好きな笑顔だ。

もしも今、新一がどこかであの彼女と寄り添っているとしたら。

昼下がりの、額がくっつきそうなくらいに顔を寄せていたふたりが頭の中を過ぎり、くだらなくな

って少し笑った。

3、純粹無垢な彼女（後書き）

ご無沙汰です。久々の投稿ですv v

が、更新遅めです。次の投稿にも間が空くかと思われます。必ず
完結しますので、しばしお待ち下さいませ。

4、一致した利害

4、一致した利害

このごろ、蘭が塞ぐことがある。

それはぴんと張りつめていた気がわずかにゆるんでしまう、ほんの一瞬だ。ときどき、遠くを見つ

めるみたいに、力なくぼんやりとする。かと思うと、びっくりするくらい上機嫌に笑ったり、あとは

なんでもない表情をして、にっこりと笑う。いつもそうしていたように。

でも、ふと陰る顔を見てしまった以上、笑った顔さえ痛々しく見えてしまう。もっともっと自分に

正直に感情を吐露すれば楽になるはずなのに、と園子は思うのに、蘭は変なところで虚勢を張ろうとする。

もっとも、帰るあてのないあの幼なじみを、ずっと待ち続けているのだ。果てしなく続くと思えた

その時間。それに屈しないように、大丈夫、と言い聞かせるようにして、我慢して強がっていても不

思議ではなかった。

でも、新一は帰ってきた。となりのCRに彼はいる。新一は進級と引き換えに編入試験をクリアす

ることで、帝丹高校三年生へと無事復帰を果たしていた。約一年ぶりにもなる新一の姿に話は持ちき

りで、春休みあけの、それでなくとも騒々しい教室に拍車をかけていた。

「蘭、どうしたの」

園子は訊く。またぼんやりと押し黙ったようにしていたからだ。

新一が帰ってきた今だったら、なにも問題はないはずなのに、と園子は思う。ただひとつ、偶然と

はいえ、伊豆で目撃してしまったあのことさえ除けば。

大丈夫？、と訊きながら、蘭の前の席に腰かける。

「やだ園子ったら、どうもしてないわよ」

ほら、ね、と空元気みたいに言い、笑う。心配してんのに。非難めいて言うのと、ありがとう、と言

い、蘭はやっぱり笑った。

「新一くんさあ、無事復帰できたんだね」

数秒の沈黙があつて、

「そうだね」

と力なく蘭は答える。まるで他人事みたいに。その言い方は感情がごそりと欠落している。

「蘭、あんたどうしたの？嬉しくないの？」

顔を覗きこみながら園子は訊く。

うーん…、としばらく躊躇して、やがて蘭はゆっくりと口を開く。

「新一ね、女の子を連れて帰ってきたの。春休み中、博士の家の前で見ちゃって」

「女の子？」

その発言に、園子も少し頓狂な声を出して驚いた。

そう、女の子、と蘭はつぶやくように繰り返して、驚いてあたり前だよ、と絶望的な顔をした。

杞憂であつてほしい、そう願っているのに、その願いはいとも脆く崩れ去る。まちがいでなく、あの

彼女。よりによって蘭に見られていたただなんて。

「蘭には会つたの？」

春休み、園子は伊豆から帰ってくるなり、新一に電話をした。あいつも米花町に戻ってきていると

踏んだからだ。

「園子から連絡が来ると思ったから、確認してからにしようかと」
工藤邸で久しぶりに会った新一はあっさりと言った。あんまりにも淡々と言うから、呆れるよりほかなかった。

「蘭には言ったのか？」

「知らないほうがいいこともあるでしょう。莫迦ね」

そだな、と新一は言い、苦笑いをした。

知らないほうがいいこともある。ほとんど無意識にそうして、蘭にはうそぶいた顔をつくろう。後

先なんてまるで考えてない。

「私はね、蘭を傷つけないの」

園子は強く主張した。それだけが気がかりだった。

「俺だって、傷つけない」

あたり前だろ、と新一はきっぱりと言った。

傷つけない、新一はたしかにそう言ったのに。

園子が新一と秘密うちに会った数日後、新一が帰ってきたの、と蘭が告げたときも、ちっとも嬉し

そうにしていなかった。めがねのがきんちよがいなくなってから、急に増えたため息だって、まるで

そのままだった。目を潤ませて、よかった、と言ったと思っていたのに。あるいは、笑いながら冗談み
たいになじるとか。そのどちらでもない予想外の反応に園子は気色ばんだ。

でも、詰問するには咎めた。「実際のところ」を知っているだけあるし、少なからずそれに対して
うしろめたさを感じていた。それでも、親友がこんなに塞いでしま
うまで放っておけるほど、冷淡で
はない。

園子は神妙な面持ちで、蘭の手をわしづかみにして強く言う。

「詳しく話して、蘭」

蘭を泣かせるなんて、私が許さないんだから。

蘭は園子の手をぎゅうと握り返して、目をつぶって小さく息を吸う。

「どっしたらしいの？」

蘭の、心臓の奥底に引つかかっていた弱音がぼろりとこぼれた。

蘭によると、その女の子を見たのは偶然で、新一から連絡があった少し前のことだという。

時期からするとおそらく、あのふたりが伊豆から帰ってきたときだ。

工藤邸の前を通り眺めて、そうして帰路に着く。蘭は思いついたように、ときどきそうしていた。

そのある一日の、目に飛びこんできた偶然。

待っていてくれ、とだけ言い残していった。そうして、忘れたところに電話を寄越してふたたび音信普

通になる。一方的に心臓をざわつかせて、またふいつといなくなる幼なじみ。

待ちわびた幼なじみが突然目の前に現れて、喜びに心が躍ったのはほんの束の間のこと。

駆け寄ろうとして、足がすくんだ。

新一のとなりには、きれいな女性。ふたりの表情に釘付けになった蘭。なにかしら近寄りがたいものを感じて躊躇していたら、キスをあてられた、というのだ。

それじゃあ、私があいつに話したときには、蘭はすでに杞憂を抱えていた、ということになる。

「取引成立だな」

蘭は傷つけない、きっぱりとそう言ったあと、少しの間があつて、新一は唐突にそう言った。

「なによそれ、と眉間にしわを寄せながら園子は訊いた。

「蘭を傷つけないんだらう？」

「そうよ、とはつきりと言い、眉間のしわをさらに険しくする。

「だから、利害が一致したってことだ」

つまり、黙っている、ということだ。それが言わずとわかつて園子は唇をかんだ。

これだから嫌だ。蘭に内緒で取引するみたいなのも、手のひらで転がされるみたいに話されるのも。

弱みを握られて身動きがとれなくなる。

でも、取引は無事ではなく、結果として一方的に反故されたみたいな風だ。新一がこのことを知っ

てか知らないでか、蘭はこの上なく深く傷ついている。

「すつごくきれいな子だね。色が薄くて髪なんてきれいな茶色で、折れそうなくらい線が細くって、でも存在感はあるって感じの子」

ため息みたいに蘭は言う。

突然現れた彼女の素性はなにひとつわからなかった。得体の知れない女。彼女を思いだすと、園子でさえ訝しげな表情をしてしまう。

新一とひと通りの話が終わったあと、せつかくだからと、彼女を

紹介してくれた。有能な科学者だ

から、顔見知りになっておいて損はないはずだ、と。

はじめまして、と彼女は言い、ひんやりとした顔に作った笑みを浮かべた。そうして、宮野志保だ

と名を告げた。彼女曰く、新一の主治医だと。私のことは心配しないでもいいとも。

たしかに伊豆で見た彼女だった。あの時は少し遠くてはつきりと

わからなかったけれど、実際、彼女はきれいだった。女の私から見ても。

蘭から話を聞きながら、これは新一に問いただす必要がある、園子はそう思った。自分でさえ口封じに行つたみたいなの、とにかく気にそまない取引だったけれど、これが上手くいけばお慰みだ。園子は蘭に気づかれないように小さく笑った。

「この園子様にまかせて」
ね、と同意を求めみたいのに、園子は言った。自信たっぷりのその態度に、蘭は苦笑しきりだった。

+++

こんな風にあたり前にそこにいる新一を見るのは、ちょっと意外だった。自宅である工藤邸でもなく、そのおとなりの博士の家。博士とは昔なじみだとはいえ、と蘭は顔をしかめた。

園子に事の顛末を話すと、心配事は解決すべき、と言った。早いほうがいいとも。

昔みたいに帰りは一緒に、と淡い期待を抱いていたのに、新一は授業が終わるや否や、さっさと姿を消してしまった。別々の場所で、それぞれが暮らした一年。たった一年だと思つのに、ひとつってこんなに変わってしまうのだろうか。

「そんなこと、気にしなくなつたっていいのよ」
園子はいかかわらず自信たっぷりだ。

「そうよね、きつと杞憂よね」
だから、なにも押しかけなくても、と及び腰になる私の腕を、園子は強引に掴んだまま離そうとし

なかった。新一の家に行くまでの途中、歩きながら、園子はぼつりと言った。目を逸らしちゃだめだよ、と。

あんまりにも唐突だったし、その上いつになく真剣な口調で、しばらく呆気にとられてしまった。

けれど、すぐに、そうだよ、と言い、大きくうんと頷いた。

親友の力強い言葉はなによりも心強い。それだけでまっすぐにいられると、蘭は思う。たとえ、そこに散散たる結果が待ち受けていたとしても。

ふたりでせつかくやってきたというのに、工藤邸からは一向に人の気配がなかった。返事のない呼び鈴に諦めて背を向けたとき、蘭と園子に声がかかった。

渦中の彼女だった。

新一は阿笠邸にいる、と言う。それを訊いて、園子は手間が省けた、と言うし、あの彼女は邪魔だから引き取って、などと冗談ともとれない冗談を言う。

訳がわからなかった。訳がわからないまま、ずるずると引きずられるようにして阿笠邸へとあがった。

どうぞ、という声がして、目の前に紅茶が置かれた。ありがとう、と言い、ひと口啜る。啜りながら、ふたりの様子を交互に見た。

新一は我関せずと、本に夢中になっているし、あの彼女はキッチンに戻って、珈琲を淹れているよ、うだった。

ふうん、珈琲なんだ、と蘭は思い、一年か、とつぶやくように言う。待ち続けるだけしかできなかった時間。なにもできないであっさり過ぎ去ってしまったことに、中途半端に哀しくなっていた。

「どうしたんだ、ふたり揃って」

あの彼女が珈琲の入ったカップを置く。と同時に、杞憂の原因である新一が訊いた。

どうしたじゃないでしょう、とため息とともに答えたのは、あの彼女だった。

彼女が視界に入るとほとんど無意識に身体をこわばらせてしまう。頭の中を過ぎる、唇を重ねたふたり。思いだすたびにため息がこぼれてしまう。

「彼女が迎えに来てくれたのよ。さつさと帰りなさい」

「いーじゃねーか。どうせ飯もここで食べるんだ。このまま居る」

新一は言い、開いていた本にふたたび視線を落とす。

わがままを言う子どものようなだと、蘭と園子はぎょっとして、ふたりの様子に沈黙してしまった。

「ご飯の時間になってからいらっしやい」

「ここに居るのはいつものことだろ」

「論文を仕上げたいの」

「志保は地下に行けばいいーじゃん」

「あなた呼びつけるじゃない。うるさいもの」

「珈琲はあと食後でいい。おとなしくしてる」

「いつも口だけでもしょう」

「俺、信用ない？」

「欠片もないわ」

「ひでつ。すっげー傷つくんですけど」

「蘭さんに癒してもらいなさい」

「お前なあ、仮にも主治医だろーが。心の傷は身体の不調にも影響すんだろ」

「精神は守備範囲外。おあいにく様ね」

「あれ、新一くん？」

新一と志保が会話を交わす中、園子はぼつりと訊く。

たぶん、と蘭は苦笑しながら弱々しく頷く。ふたりに顔を見合わせ、ぎこちなく笑う。その間も渦中のふたりは話続けている。

言いあっているかのように思える会話も、対等に接して遠慮がないだけだ。でも私の知っている新

一は昔からかっこつけのはずだし、私とはもっとやんわりと噛んで含めるような話し方をする。自分

と話す様とはまるでちがう、なめらかな会話。

「変わったみたい？」

園子もそう思うよね、とふたたび蘭は頷く。

「もう少し、かっこつけだったよね」

春休みに会ったときは、あんなに幼くなかったよ。蘭は困惑した表情をして、ふたりを見つめる。

見つめながら、はっきりさせるべきことを思いだす。蘭はソーサーごとカップを机に置いて、顔をまっすぐにあげて背をぴんとさせる。

「ひとつだけ訊きたいの」

蘭はふたりの会話を遮るように、唐突に話し出す。となりに座る園子が緊張した顔になるのがわかって、にっこりとした顔をむけて、大丈夫だから、と言う。

「新一が春休みに帰ってきて、初めて電話をくれる少し前にね」

蘭は言い淀みながら、ゆっくりと言葉をつむぐ。

「博士の家の前で、その、彼女と…」

「キスしてた」

三人が一様に志保の顔を見る。

「そう、キスしてたって訊きたいんでしょう」

志保は小さく笑う。蘭はたちまち赤面して沈黙してしまった。

「間違えているんじゃないかしら」

志保はあつさり答えた。落ちついていた新一の顔が急に歪んで、志保、と強く言う。いいから、と咎めて志保は続ける。

「たぶん、黒羽くんと間違えているのよ」

彼、工藤くんと似ているから。背格好も、顔さえも。

「会わせてあげたいくらい」

志保は同意を求めるみたいに、ね、と新一に言う。新一は顔を歪めたままだったけれど、曖昧に頷く。志保はあいかわらず小さく笑ったままだ。

黒羽くん、と言われたって、どこの誰だかちつともわからない。

けれど、あのキスの相手が新一ではない。途端に嬉しくなって体中の力が抜けていく。立ちこめていた霧がいつぺんに晴れたみたいにな清々しさ。

「それに、工藤君に幼なじみのかわいい彼女がいることは知ってるわ。お似合いのカップルですもの」

私は単なる医者。だから気にしないで。志保は言い、ぬるくなつた珈琲を啜る。

「お前なあ、あんな」

言わないで、と言って、志保は新一の口に指を当てた。

「主治医だつて的確な表現よ。私がいなければ、あなたは生きられないのだから」

もう、おしまい。志保は子どもに言い聞かせるように言って、新一の背中をポンとたたく。

ふたりの距離がないとか、会話がなめらかだとか、来たときには思った不穏なことも、もうどうで

もよかった。新一は待っていてくれ、と言って、私はそれを律儀に守って、約束通りにちゃんと帰って

きてくれたのだから。杞憂は杞憂だった。単なる取り越し苦労。

蘭は残っていた紅茶をぐくりとひと息で飲み干して立ち上がった。

「新一、帰るよ」

「は？」

その場にいた誰もが啞然として蘭を見た。だから、帰りましょう、と繰り返して言う。

「えっと、志保さんだっけ？ごめんね。新一がお邪魔したみたいで」

「え、いいえ」

「ほら、新一行くよ」

「ちよつと、蘭ったら、いいの？」

園子は慌てている。でも、うん、いいの。と言う。

「だって、お医者様なんでしょう。彼女、私たちのこと知ってるみたいだし」

志保が新一の背中をポンと押す。

「長いあいだ、待たせた彼女なんですよ。ほら」

蘭に便乗して志保が言う。

「蘭さんをお願いするわ。工藤くんのこと、見張ってて」

志保の穏やかな物言いでないことに驚いて、玄関へと向けた歩みを止めた。

「派手な行動を自重するように。むやみやたらに出歩かないこと。

風邪でもなんでも、体調の異変が

少しでも見られたら、すぐにでも連れてきて。でないと」

「でないと？」

目が怖かった。人を見透かすあの目。

「目立てば殺されるわ。体調が悪化すれば死ぬわ。だから、頼んだわよ」

もういなくなって欲しくないのでしょうか。

「・・・うん」

「ぐくり、と息を呑んで、首をたてに振る以外できなかった。彼女のはつきりとした強い口調は、冗談ではなく真剣そのものだ。

+++

新一がふたたび志保のもとに来たのは、陽が沈んでからだだった。蘭はおっちゃんの夕食の用意を

気づかせるまで、とても解放なんてしてくれそうもない勢いだった。いろんな表情をする蘭を知っているはずだった。けれど、あれだけ上機嫌で、かと思えば、目を潤ませて懇願するように見る彼女は、異様と言ってもよかった。

蘭が帰ったあとに残ったのは、ぐったりとするような疲労感。はつきりさせてしまうことに対して躊躇する焦燥感。

志保だって、米花町へともどつてからというものの、どうにも手に負えない。いや、もともと手に負えるような女ではなかったのに、伊豆で抱きしめた彼女は夢だったかと思うほど、今ではもう影も形もない。

「持ち帰らないでね」

伊豆から帰る間際、志保は唐突にそう言った。

なにを、と訊くと、ここでのこと、私たちのこと、と言う。なんで、とさらに訊くと、蘭さんを傷つけたくないから、と言う。まるで他人事のように言っただけのその様子は、つい数時間前までのそれとは不釣り合いなくらい、滑稽に見えた。

まったく滑稽だ。志保も園子も、あるいは自分でさえ、傷つけないと、必死で蘭をかばう。

こんなはずではなかったのに。そう思いながら、新一は合鍵で玄関をがちゃりと開けて阿笠邸へと

入っていく。そうしてまっすぐに地下へと向かう。途中、博士が新

一の歪んだ顔にどうしたんじゃ、と訊いたけれど、なんでもねえよ、とだけ言ってそのまま通りすぎた。

志保はいつものように地下にいて、論文を書きしたためているようだった。

新一の存在に気づいて、志保は「ほん？と訊く。なにもなかったように言う志保に、そんなことじやねえ、と咎めた。

「随分、怖い言い方するんだな」

「正直に言っただまだよ」

「蘭も園子も怖がっていた」

「それくらいでちょうどいいのよ」

あなたにも。彼女にも。志保は言い、振り返ったところで目があう。

「まさか、お前が蘭を丸めこむとは思ってなかった」

「お褒めいただいて、痛み入るわ」

志保はにっこりと笑う。これで元どおりでしょう。ふたたび背を向けて、パソコンへとむかう。

元どおり。志保にそんな風に言われるのは、不愉快でしかなかった。

蘭に指摘されたあのキスの一部始終だって、自分もあるいは志保でさえ、蘭がいたことはわかっていた。わかっていて、志保に手を伸ばした。そうして、あてつけるようにしてキスをした。

伊豆から帰ってきたその日の昼下がりに。

志保は、いい訳を考えておきなさい、と言っただけれど、弁解することなんてちつとも思い浮かばなかった。

「あなた、勘違いしてるのよ」

一点を見つめたまま、志保は言う。

「あの閉ざされた空間にふたりきりしかいなくて、それであなたは魔が差したの」

それだけなのよ。感情をこめずにそう言って、こちらを見ようともしない。

もし、あの時間がなかったら、と新一は思う。志保の言うとおり、ほとんどなんの迷いもなく、蘭

を好きだと疑わずにいたのかもしれない。ただ、あの閉ざされた時間があつて、それで気がついてしまっただけだ。

決して後悔しているわけでもない。むしろ、あれでよかったのだと思っている。あのとき、志保を

放っておけなかったし、抱きしめていたかったのだ。

新一は黙って志保に近づいた。志保はなによ、と訝しげに見上げた。

そうしてなにも言わずに、唇を塞いだ。堰を切ったように、互いの手が互いの頭と背に回り、舌が

絡み、時が永遠かと思うほど存分に味わって、ようやく離される。

「こんなキスしても？」

「それでも、あなたはここにいるべきではないのよ」

行き止まりだ。まったく動じる様子もない志保に、新一は深々とため息をついた。

志保は思ったより頑固なのだ。彼女の意思を曲げさせるのには、骨を折るくらい苦心する。

わーった、ため息とともにそう言って、新一は阿笠邸をあとにした。

4、一致した利害（後書き）

大変お待たせしました。更新遅めと予告した通り、本当に遅めです。

もしかして、と思うのですが、ブログに載せたこれを見たという奇特な方が中にはいらっしゃるかもしれませんが。

大まかな筋としては変わっていませんが、読みやすくなったかと思えます。たぶん。

どうも全体の歯切れが悪くて、4、をゴっそりと書き直しました。

（ブログも修正済）

ごめんなさい！（泣）

次回の更新もまちがいに遅めです。次回は5、恋人に望むこと、その次は6、罨（飯）、次は7、俺の女（飯）。

てな感じです。今ほしいのは果てしない自由な時間とどこでもドア。それではまた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5831b/>

毒薬と約束

2010年10月10日19時50分発行